



## お嬢様の別荘へ

---

その後しばらくして、リムジンは海沿い近くの大きな家に到着した。ここは、美津華の家が所有する、屋敷とプライベートリゾートだった。家から見える海はとても綺麗で、歩いて数歩の位置に海があった。

そんな家の前にリムジンは到着し、夏菊達は外へ出た。

「うわぁー！　すごい家！！」

ジョイは外に出て、まず見た別荘に驚いた。普通の一軒家を、丸々10個程集めたかの様な大きさだった。

「さ、どうぞ。」

美津華は皆の先頭に立ち、別荘へ招待した。夏菊達は運転手が下ろした手荷物を持って、別荘へ向かって行った。

「お帰りなさいませ！　美津華様！　ご友人様方！！」

別荘に入ると、別荘の管理を任されている執事やメイド達が夏菊達を出迎えた。

「今日はお世話になります。」

夏菊達は別荘に住んでいる方々にそう言った。

「お荷物をお預かりいたします。」

夏菊達の下に数人のメイドがやってきて、夏菊達の手荷物を受け取った。

「お部屋へご案内いたします。」

メイドは手荷物を持ったまま、それぞれの部屋へ誘導した。夏菊達はメイドを先頭に、泊まる部屋へ移動した。別荘には2人1部屋が用意されているため、夏菊達はそれぞれの部屋に入った。

ストレンジャーは夏菊、アルドールは美津華、ピスフリーは藍樹、ジョイは恵と同じ部屋に移動した。

「うわぁー、ここからの景色もすごいねー」

夏菊は今晚泊まる部屋に移動して、そこからの景色に絶賛した。  
部屋からは普通に海が見えており、とても綺麗な景色だった。

「こんなにいい部屋で泊まれるのか。　すごいな。」

「お荷物はこちらに置いておきます。」

夏菊の手荷物を持っていたメイドは、ドアの近くの台に荷物を置いた。

「ご用の際はこちらの電話をお使いください。　それでは、失礼いたします。」

メイドは一通り部屋の説明をし終え、出て行った。

夏菊はメイドがいなくなると、ドアを開けてバルコニーに出た。

「うーん。　海風が気持ちいい～」

夏菊は髪を靡かせつつそう言った。

さわやかな海風が吹いており、気分はとてもよかった。

「素敵な場所だな。　海が近いなんて、俺達の住んでいる場所みたいだな。」

「そうだねー」

ストレンジャーはいつも生活している島の事を思い出しつつ、そう言った。

夏菊はストレンジャーの行った事に相槌を打ちつつ、海を見ていた。

「夏菊ー　俺達も海に行こうぜ！」

不意に夏菊とストレンジャーが見ていた方向とは逆の方向から声がし、夏菊は振り返った。

するとそこにはもうすでに水着に着替えた藍樹と服と手袋を脱ぎ、素足のピスフリーがいた。

すでに海への突入はOKで、いつでも出陣できる体制だった。

「早いな藍樹一　じゃあ自分達も着替えようか。」

「そうだな。」

夏菊からの意見に、ストレンジャーは同意した。

「俺達先に行ってるから、早くこいよー」

「じゃあなストレンジャー」

2人は走って海へ向かって行った。

「さてさて、海を楽しもっか！」

「おう！」

夏菊は持ってきた荷物の元へ向かって行った。

ストレンジャーは着ていた服と靴を脱ぎ、手袋も同様に取った。

手にはリストバンドのみ付いていた。

ストレンジャーは脱いだ衣服と靴を持ち、ベットの近くへ置いた。

夏菊もさっさと水着に着替え、準備万端だ。

「はい。　ストレンジャー君のサンダル。」

夏菊は手にストレンジャー用のサンダルを召還した。

そのサンダルは、夏菊がストレンジャーが夏場に履くために作ったものだ。

防水加工はバッチリ、海でも使えるものだ。

「ありがとう、マスター」

ストレンジャーは夏菊からサンダルを受けとり、履いた。

サイズはピッタリだった。

「うん。　よく似合ってるよ。」

夏菊はサンダルを履いたストレンジャーを見つつ、言った。

「ありがとうマスター。　じゃあ俺達も海に行こうか。」

「うん。」

夏菊は部屋を出て、ストレンジャーの手を掴み、海へ向かって行った。  
2人は楽しそうに海へ向かって行った。

2人が海に向かうと、外にはすでに全員が外に出ており、海を満喫していた。  
美津華とアルドールはパラソルの下のビーチベットにいた。

「もうすでに皆外にいたんだね。」  
「ええ、四神君も好きなように過ごしてね。」

夏菊はそういわれ、皆の過ごし方を見た。  
恵とジョイは浅瀬でビーチボールで遊んでいた。  
藍樹とピスフリーは少々深いところで水泳で競っていた。  
だがその水泳は普通では無く、すごい勢いで泳いでいた。  
まるでオリンピックの競技のようだった。 そのうえほぼ互角だった。

「藍樹は体力あるなー ピスフリーと互角なんて。」  
「ピスフリーは普段から体力あるのは知ってたけど、ほぼ互角なんて。 藍樹はすごいな。」

夏菊とストレンジャーはそんな2人を見て感心しつつ言った。

「夏菊ー 美津華ー ビーチバレーやらないー？」

夏菊達がパラソルの下にいると、恵とジョイがこちらに向かってきた。

「そうね。 せっかくだからやりましょうか。」  
「自分もいいよ。」

夏菊と美津華は恵にOKを出した。

「ストレンジャーとアルドールもやらない？」

ジョイも同様にストレンジャーとアルドールに言った。

「いいぜ。」

「いいわよ。」

「じゃあ決まりね！ 行きましょ！」

意見がまとまり、6人は海の浅瀬に向かって行った。

「行くわよー！ それっ！」

恵は持っていたビーチボールを打ち上げた。

「えい！」

アルドールは近くに落ちてきたボールを打ち上げた。

「よっと！」

夏菊はそのボールを拾い、打ち返した。

「おっと、」

ジョイはそのボールを打とうとしたが、少々足が引っかけり、届かなかった。

「ジョイー 早くー」

「わかってるわよー」

ジョイはボールを拾い、皆の下へ向かって行った。

「ふう、疲れたー ピスフリーは早いなー」

「藍樹もだぜ。 なかなか抜かせなかったよ。」

藍樹とピスフリーは、夏菊達と少々離れた岩の上に座っていた。

散々泳いでいたためか、少々疲れていた。

「お、皆ビーチバレーをしてる。」

「俺達もやろうぜ。」

「おう。」

2人は少し休んだ後、夏菊達の下へ向かって行った。

「おーい、俺達も混ぜてくれー」

藍樹は夏菊達の元へ到着すると、声をかけた。

「いいよー、一緒にやろうー」

「じゃあ3対3にしましょ！」

「OK！」

恵の提案に、ジョイはOKを出し、ビーチバレーのチーム戦になった。

「ハハハ、随分と楽しんでいるな、あいつら。」

その様子を、美津華の別荘の屋根の上から2人の人影が見ていた。

「でも楽しそうね。 私達も遊びたいな〜」

リスはそう言いつつ夏菊達を見ていた。

「ま、仕事が終われば楽しめるさ。 まだその時期じゃないだけだからな。」

黄色い獣はリスをなだめる感じにそう言った。

「じゃ、始めましょうか。」

「そうだな。」

♪～♪～～♪～

黄色い獣は持っていたラッパを吹いた。

すると、近くでスタンバイしていた大量の迷人が出て、夏菊達の下へ向かって行った。



## 別荘への襲来

---

『？』

交代で審判役になっていた夏菊は、不意に何処からかラッパの音が聞こえ、辺りを見渡した。だが辺りには何もいない。

「どうしたんだ？ マスター？ ！！」

ストレンジャーが夏菊の方を振り向くと、こちらに向かって大量の迷人達が襲ってくるのが見えた。

「皆逃げろ！！」

ストレンジャーは敵が来るのを発見し、美津華達に言った。  
試合をしていた美津華達はストレンジャーの声に反応し、辺りを見た。

「な、何！？」

「チッ、いい所で邪魔をするなんてな！」

ピスフリーはそう言うと藍樹を抱え、別荘へ向かって行った。  
動揺にアルドールとジョイも美津華と恵を抱え、別荘へ避難させた。

残った夏菊は持っていたクローバーを出し、ラブソディに変身した。  
ストレンジャーも同様に手を胸の前に構え、服を身に纏い、手に剣を召還した。

「こんな所まで来るなんてな。」

「話し合いでは無駄みたいですね。」

ラブソディとストレンジャーは敵を見つつそう言った。

<死ねえええ！！>

敵はそう言い、手を刀に変身させ、襲い掛かってきた。  
ストレンジャーは持っていた剣で、敵の攻撃を受け止めた。

「そう簡単には死んではられないな。」  
「そう言うことです。 ラブボンバー！！」

ラブソディは手にハートを召還し、敵の大群に放った。  
ハートは敵にぶつかると激しい熱と衝撃波を出し、敵をなぎ払った。  
ストレンジャーは敵の攻撃を払い、相手に切りかかった。  
一部の敵はストレンジャー、残りの敵はラブソディに向かって襲い掛かってきた。

ストレンジャーはピスフリー達に戻ってくるまでの間、大量の敵を一人で食い止めた。

「チッ、敵が多いな。」

ストレンジャーは若干困まれつつも相手を切り、道を作りつつ戦った。

<消えうせろ！！>  
「消えてられっかって！！ ファイヤーブレス！！」

ストレンジャーは口から炎を吐き、相手を剥ぎ払った。

一方ラブソディは、相手からの襲撃を、傘を召還し上空へ逃げてかわしていた。

「アニティアイス！！」

ラブソディは空中から相手に向かって氷を連発した。  
敵はその攻撃を食らい、氷付けになった。

「ダイヤモンドビーム！！」

今度はダイヤを召還し、凍った敵目掛けてビームを放った。

ビームを食らった敵は、粉々になり、近くにいた敵にそのまま攻撃した。

「仕上げは、カップウォール！！」

ラブソディは敵が動けない隙を付き、手に杯を召還し、大量の水を上空から敵目掛けて発射した。

敵は大量の水を食らい、四方八方に流された。

ラブソディは敵がいなくなったことを確認し、空からストレンジャーを見た。

ストレンジャーは敵に囲まれつつもその場で戦っていた。

だがやはり敵が多いこともあり、少々疲れているみたいだった。

「クエンス！」

ラブソディはストレンジャー目掛けて癒しの光を放った。

『？ 体の疲れが。』

ストレンジャーはラブソディからの癒しの力を受け、疲労が消し飛んだ。

「これならまだまだ行けるぜ！ クリスタルウェーブ！！」

ストレンジャーはそう言うと、剣を砂浜に突き刺し、地上から出てくる水晶の波で攻撃した。

敵は近かった事もあり、避けられず攻撃を食らい、辺りに吹き飛ばされた。

『よし、突破口が出来た！』

ストレンジャーは敵がいなくなった方向へ移動し、敵を迎え撃つ体制に。

「かかって来い！！」

ストレンジャーは向かってくる敵に向かってそう叫んだ。

ラブソディはストレンジャーが無事に敵をなぎ払い、囲まれた状態から良くなったことを確認し、下へ降り立った。

「よし、自分も」

「行って、どうするんだ？」

不意にラブソディの後ろから声がし、ラブソディは後ろを向こうとした。

♪～～

「！！」

だがその前に敵がラブソディに向かって音を奏で、ラブソディは気を失ってしまった。気を失ったラブソディを、黄色い獣が受け止めた。

「作戦成功！」

隣にいたリスは喜んだ。

「ちょろいもんだな。」

黄色い獣は自分が抱えるラブソディを見つつ、そう言った。

「俺達も加勢するぜ！！ スtrenジャー！！」

すると、ストレンジャーのいる方角から別の声がした。

「おっと、もう加勢が来たか。」

黄色い獣はそう言い、その方向を見ていた。

ストレンジャーが敵と戦っていると、後方からアルドール、ピスフリー、ジョイが服を着た状態でこちらに向かってきた。

「皆！」

「俺達も加勢するぜ！ スtrenジャー！！」

ピスフリーはそう言うと、手にハンマーを召還し、スピードと勢いを利用して敵をなぎ払った。

「セイントロンド！」

アルドールは手に扇を召還し、カマイタチでなぎ払った敵を攻撃した。

「アクアギャンブル！！」

ジョイは手に銃を召還し、別の方向へ吹き飛ばされた敵目掛けて銃を発砲した。銃からはトランプが出てきて、相手を攻撃した。

一瞬にして敵は居なくなり、ビーチに敵はいなくなった。

「！ マスター！？」

ストレンジャーはラブソディの姿がないことを知り、辺りを見渡した。

「あ！ あそこ！！」

アルドールは少し離れた場所にいた敵を指差した。

ストレンジャー達は指差した方向を見ると、そこにはラブソディが気を失って抱えられていた。

「おやおや、随分と早く片付けられてしまったな。」

「もう少し楽しませてよね。 弱いわ〜」

2人の獣はいなくなった迷人達に向かって言った。

「マスターを返しなさい！！」

アルドールは敵に向かってそう言った。

「すまないが、それは出来ない相談だな。」

黄色い獣はストレンジャー達に向かって言った。

「アリス様がこの方を求めているの。 ごめんなさいね。」

リスは少々おちょくった様な口ぶりで言った。

「では、力づくで返してもらっただけだ！！」

ピスフリーはそう言うと、ラブソディを抱える2人に突撃して行った。

相手はその攻撃を避け、別荘の屋根の上に移動した。

「甘いな。 白い虎よ。」

黄色い獣はピスフリーの横を通り過ぎる際、そう言った。

移動の際、ラブソディが持っていたクローバーが落ち、中から他のオリジナルキャラクター達が出てきた。

「！！ マスター！！」

ビリーブは今の状況を把握し、ラブソディを見つつ言った。

「貴方達、何者ですか？」

ジョイは相手に向かって問いかけた。

「俺はホープ・ザ・エレクトリクリィだ。」

「私はホネスティ・カメラアよ。 よろしく～」

ホネスティはおちよくなったままの言動でストレンジャー達に言った。

「お前ら、マスターをどうする気だ！」

コレージは相手に向かって言い放った。

「殺しはしないさ。 アリス様が求めている、それだけだからな。」

「返して欲しかったら、私たちのいる城まで来るのね。 見つかったら、の話しだけど！」

ホネスティはそう言うと、持っていたステッキから大量の花を召還し、ストレンジャー達の目くらましをした。

「ちっ！！」

ストレンジャーは降りかかってくる花をどかしつつ、相手を見た。

だがもうそこにはホープ達の姿は無く、ラプソディも連れて行かれてしまった。

「マスター！！」

ストレンジャーはラプソディを探したが、もう何処にもいなかった。

「くそっ・・・！」

ストレンジャーはその場に崩れ、地面を叩いた。

アルドール達は、そんなストレンジャーを見ることしか出来なかった。

## 雷獣とリスの願い

---

「皆さんご無事で！　・・・四神君は・・・？」

別荘のホールで皆を待っていた美津華は、帰ってきたストレンジャー達の姿を見て喜んだが、夏菊の姿がない事を知り、問いかけた。

ストレンジャーは顔を横に振った。

「ごめんなさい。　どこかへ連れて行かれてしまいました・・・」

ビリーブは涙を流しつつ美津華に言った。

美津華は驚き、顔を手で覆った。

「そんな！　四神君・・・」

「何処へ連れて行かれたんだ？」

同じくホールにいた藍樹はピスフリーに問いかけた。

「それがわからないんだ。　ただわかるのは、どこかにある城だという事ぐらいだ。　クソッ。」

ピスフリーは壁を叩きつつ藍樹にそう言った。

「とりあえず、俺達はこれからマスターを探しに行くぜ。　早くしないとマスターの命が危ない。」

ストレンジャーは美津華達にそう言った。

「でも、何処を探せばいいのかわからないんじゃどうしようも無いんじゃ・・・」

不意に恵はストレンジャーに言いかけた。

「手がかりは二つある。　1つはどこかの城。　もう1つはあいつらがオリジナルキャラクターであることぐらいだな。」



ストレンジャーは夏菊を連れ去った2人の事を思い出し、手がかりを述べた。

「じゃあ、皆さんのいた世界のどこかにいるということですか？」

「そう言うことになるな。 あいつらの言っていた『アリス』って奴のことも気になるがな。」

コレージは少ないが得た情報をまとめ、気になる事柄を言った。

「現実世界で、皆さんのいる世界に行く方法はあるんですか？」

ふと美津華はその場所へ行くルートが気になり、ストレンジャー達に問いかけた。

「僕達は皆、マスターの持っていたクローバーから元いた世界と現実世界を行き来してきました。」

「夏菊の持っていたクローバー以外で、他に行く方法とすれば・・・」

ホールにいた美津華達とストレンジャー達はその方法を探した。

「そういえばマスターは、俺達にクローバーを託す前は夢から行ったって言ってたな。」

ふとストレンジャーは初めてラプソディと出会った時の事を思い出し、そう言った。

「夢から？」

「ああ、作られた者達と現実世界にいる人物が出会える場所は、夢の世界。」

「じゃあ、創造主の見る夢の中からなら、私達がいた世界に行けるんじゃない？」

美津華はふとそう思い、皆に提案を出した。

「確かに、創造主の見る夢からなら、行けるかも知れないな。」

「夢の中を行き来できるビリーブの力を使えば、全員行けるんじゃない？」

恵はその提案にさらに提案を付けたし、皆に言った。

「ビリーブ、皆で行けそうか？」

ストレンジャーは少々疑問に思い、ビリーブに問いかけた。

「はい、創造主の見る夢の扉を開けば、皆さんをお連れすることは可能です。」

「よし、決まりだな！」

皆の意見はまとめ、作戦が決まった。

「あ、待って！ 夏菊君がいない今、創造主の見る夢は無いんじゃない・・・」

「いや、まだ他にも、創造主はいる。」

恵の言った意見に対し、ブラベリーは別にいると意見を述べた。

「そうか、ブラベリーの元マスター！」

「あの病院にいる方々なら、僕達のいた世界への夢へ入れます！ 記憶喪失で入院している患者は皆、迷人達の元マスター達です！」

ビリーブは得た情報の場所で、ストレンジャー達のいた世界に行ける事を確信し、言った。

「よし、目的地も決定だな！」

「じゃあ皆さん、急いでその場所へ向かいましょ！」

美津華はもうすでにリムジンの手配は済ませており、皆に言った。

「よっしゃ！！ 待ってろよ夏菊！！」

「待っててくださいね、マスター！！！」

藍樹達は服を着替え、リムジンへ向かって行った。

その後を、アルドール達が続いて行った。

『待っててくれ、マスター 必ず助けるからな。』

ストレンジャーは連れ去られてしまったラプソディこと夏菊に言うように心の中で言った後、リムジンへ乗り込んだ。

全員が乗ったリムジンは、急いで元来た道に戻り、目的地である病院へ向かって行った。

「う、うーん。」

一方、こちらは連れ去られた夏菊ことラブソディ達一行。  
ラブソディは何処かのベッドの上に寝ていたようで、目を覚ました。

「あ、気が付きましたよ。」

ラブソディが起きた事を察し、近くにいたホネスティはホープに告げた。

「おはようございます、ラブソディ。」

「あ、貴方達は・・・」

ラブソディは今までの記憶を辿り、どうして今の状況になっているのかを思い出した。

「そうだ、自分はその時気を失って・・・」

「はい、随分と乱暴な事をしてしまい、申し訳ありませんでした。」

「あのような事をしないと、貴方は一緒に来てくれそうにありませんでしたので。」

ホープとホネスティはベッドの上に寝ていたラブソディに言った。

「貴方達は、いったい・・・」

「目が覚めたようね。」

ラブソディが言いかけると、部屋の扉が開き、一人の少女がやってきた。  
ホープとホネスティは少女に礼をし、少し後ろへ下がった。

「ふーん。 貴方が迷人達を助けていたマスター。」

少女はベットにいたラブソディの顔を手で引き寄せ、顔を見つつ言った。

「はい、名前はラブソディ・ウルフと言います。 アリス様。」

ホネスティは丁寧な口調で、アリスと呼んだ少女に言った。

「始めまして、ラブソディ・ウルフ。 私はこの城に住み管理を任されている、チェリー・アリス・ブロッサムと言います。 よろしく。」

チェリーはラブソディに自己紹介をした。

「貴方が自分をこの城に連れてこさせた張本人様ですか。 自分にどんな御用なのですか？」

ラブソディは率直に用件を言い、チェリーに問いかけた。

「それはお答えすることが出来ません。 時が来ましたらお教えしますわ。 貴方達、しっかりとこの方を見張っておきなさい。」

「はい、アリス様。」

ホープとホネスティはチェリーからの命令を受け、承諾した。

チェリーは命令をいい終えると、部屋を出て行った。

ホネスティはチェリーが出て行き遠くへ行ったことを確認し、部屋の扉を閉めた。

「あの方が、貴方達のマスターですか？」

「いや、あんなのが俺達のマスターじゃない。」

「? どう言う事ですか？」

ホープは顔をそらしつつ、ラブソディに言った。

ラブソディはホープの言った事が良く理解できず、問いかけた。

「今のアリス様は、アリス様じゃないんです。」

「俺達の知っているアリス様は、俺達に命令なんかしない。 アイツは偽物だ。」

ホープとホネスティは少々顔を俯かせつつ、そう言った。

「自分を連れてきたのは、命令のほかに、貴方達なりの別の訳があるみたいですね。」

ラブソディは今置かれている状況を把握し、ホープとホネスティに言った。

ホープとホネスティはその言葉に反応し、ラブソディの方へ振り返った。

「ラブソディ、いや夏菊。 俺達の依頼を、受けてはくれないか？」

「今私達の依頼を受けて、アリス様を助けられるのは、貴方しかいないんです。」

ホープとホネスティは真剣にラブソディに頼んだ。

その顔と言葉に、嘘偽りはなさそうだ。

「話していただけますね。」

ラブソディがそう言うと、ホープとホネスティは顔を見合わせ、うなずいた。

「アリス様は、何かに取り付かれているみたいなんだ。」

「体は本物のアリス様なんだけど、別の正体がアリス様の中にいるみたいなの。」

ホープとホネスティは説得するようにラブソディに言った。

ラブソディは頷き、素直に話しを聞いた。

「ではあの方は今、何か別の存在に取り付かれているんですね。」

「アリス様に取り付いている存在を、倒してくれ。」

「それが、私達の依頼です。」

「もちろん、依頼を受けてくれれば貴方の今後の命は、俺達が保障します。」

ホープは依頼との引き換えの見返りを言った。

ラブソディは少々悩みつつ、ふと思いついた。

「ストレンジャー君達は？」

「貴方の作った他の存在達を、消すようあの方から命じられていますので、あの方々と出会い、こちらに誘導いたします。 消したりはいたしません。」

ホープとホネスティは手短に事情を話し終え、話しを終えた。

「わかりました。 自分に出来るかわかりませんが、貴方方のお力になります。」

「ありがとう、夏菊。」

「感謝いたしますわ。」

ホープとホネスティはラブソディの言った言葉に感謝し、2人はラブソディの手を握った。ラブソディは2人の笑顔を見て、安心した。

「しばらくはこの部屋で生活していただきますが、ご理解のうえで。」

ホープは少々遠慮がちにラブソディに言った。

「もちろんです。 皆さんがそばにいて頂けるのであれば。」

「ありがとう。 ではしばらくの間、よろしく願いいたします。」

ホープとホネスティは感謝しつつ、そう言った。

その後、ホープはホネスティを部屋に残し、出かけて行った。

## 戦略的誘導の元

---

一方こちらは例の病院の前に到着したストレンジャー達一行。

別荘から病院までの移動の際に使ったリムジンは近くの駐車場に止まり、美津華達は急いで車内から降りた。

時間帯は夕方。病院の前に溜まっていたマスコミの波はもう病院の前にはおらず、普通の病院と化していた。

「よし、急いでブラベリーの元マスターのいる病棟へ。」

「おっと、そうそう簡単に行かせては面白く無いな。」

「!!! ホープ!!!」

ストレンジャー達が病院へ入ろうとすると、病院名の付いた看板の上に立っていたホープが静止させつつそう言った。

ピスフリーはホープを見つけ、そう言った。

「随分と搜索が早いんだな。もう手がかりの場所への近道の場所に到着しちまうなんてな。」

「では、ここが貴方達のいる城への近道なんですね。」

「そう言うことだな。だがその近道へ入るには、ちょっとしたイベントも、必要なのさ。」

ホープはそう言うと、持っていたラッパをストレンジャー達の方へ向けつつ吹いた。

吹かれたラッパからは電気が飛び出し、ストレンジャー達を囲むような柵となって、地面に突き刺さった。

「少し、俺と遊んでもらうぜ。」

「そんな事してられるか!」

ピスフリーはそう言うと、手にハンマーを召還し、ジャンプして相手に向かって突撃した。

ホープはそんなピスフリーの行動を見つつ、振り下ろされたハンマーを、持っていたラッパで防

いだ。

「残念だな。」

「何！」

ホープがそう言うと、ラッパから強力な静電気が漏れ、ハンマーを伝ってピスフリーに攻撃した。

「グアァァ！！」

ピスフリーは直に強力な電気を浴び、痺れさせられた。

ホープはそんなピスフリーを回し蹴りでストレンジャー達のいる場所へ蹴り飛ばした。

「ピスフリーさん！！」

ビリーブは蹴り飛ばされ地面に叩きつけられたピスフリーの元へ駆け寄った。

「チッ、接近戦は無理か！」

「じゃあ遠距離で行くまでよ！！」

するとアルドールとジョイは武器を召還し、ホープ目掛けて遠距離攻撃を仕掛けた。

アルドールはカマイタチ、ジョイはトランプで攻撃した。

「それだけじゃあ俺には勝てないぜ！ リターン・クレッシェンド！！」

ホープはそう言うと、ラッパを吹いた。

するとホープ目掛けて飛んでいたカマイタチとトランプは一時的にその場に止まり、Uターンしてストレンジャー達の方へ戻り攻撃した。

「キャア！！」

「チッ！ 新緑召還！！」

ストレンジャーは舌打ちしつつ、地面に手を当てた。

すると地面から大木が生え、返ってきた攻撃をすべて大木で受け止めた。

「遠距離も無理か。」

「さて、今度はどうするかな？」



ホープは少々挑発口調で言った。

接近戦も遠距離攻撃も効かない状態のため、ストレンジャー達は動けなかった。

「それなら、俺が行くまで！！」

しばらく時間が過ぎ、今度はストレンジャーが剣を片手にジャンプし、ホープに攻撃を仕掛けた。

「同じ事を！」

「それはどうかな！！」

ホープはストレンジャーの攻撃をラッパで受け止め、電気を流した。  
だがストレンジャーはピスフリーの時のようには痺れなかった。

「何！」

「隙がありすぎだぜ！！」

ホープが驚いている隙に、ストレンジャーはホープの後方へ降り立ち、攻撃した。  
ホープはストレンジャーからの攻撃を守ることが出来ず、攻撃をもろに食らい、地面に叩きつけられた。

「クッ・・・」

「この剣には属性攻撃は効かねえんだ。 残念だったな。」

ストレンジャーはホープの下へ降り立ち、そう言った。  
ホープはゆっくりと起き上がり、ストレンジャーを見た。

「なるほど、結構な強さだな・・・ さすがは、あの人の作ったオリジナルキャラクターだ。」

「マスターは何処にいる？」

ストレンジャーはホープに剣先を向けたまま、問いかけた。

「あの人なら無事だ。 命の保障だけはしておいてやるよ。 あっちの世界で、城までくるんだな。」

「やはりあっちの世界か。」

ストレンジャーは剣を向けたままそう呟いた。

「では、先にそちらで待たせてもらおうか。 お前たちの目当ての患者は404号室だ。」

ホープは自分に向けられていた剣をどかし、後方へジャンプした。

「待て！」

「じゃあな。」

ホープはそう言うと、その場で跳躍し、雲の上まで飛んで行ってしまった。

ストレンジャー達は消え行くホープを見ていた。

ホープがいなくなると、ストレンジャー達を囲んでいた電気の柵が無くなった。

「余計な時間を使っちゃったな。 急ごうぜ。」

コレージはそういい、病院内へ向かって行った。

ストレンジャー達も急いで病院へ入り、目当ての404号室へ向かって行った。

その部屋は一人部屋で、患者の一人がベッドの上に寝ていた。

だが患者は普通の痩せ方では無い痩せ方をしており、余り健康そうでは無かった。

「マスター・・・」

ブラベリーは変わり果てた自分の元マスターを見つつ呟いた。

ストレンジャーはそんなブラベリーを見て、肩に手を置いた。

「記憶喪失患者であるお前の元マスターを助けるためにも、今のマスターを助けよう。」

「了解、です。」

ブラベリーはベットに寝ている患者の顔を撫で、立ち上がった。

「ビリーブ。 頼むぜ。」

「わかりました。」

ビリーブは寝ている患者の近くへ行き、患者の額に手を当てた。

『貴方の見る夢の扉を。 開けて下さい。』

ビリーブは相手に向かって心の中でそう言うと、患者の近くに1つの扉が出現した。その扉は茶色い普通の扉で、中心の右に取っ手が付いていた。

「その扉から僕達のいた世界に行けます。 準備はよろしいですか？」

ビリーブはそう言いつつ扉の近くへ行った。

「もちろんだ。」

「早く四神君を助けましょう。」

「わかりました。」

ビリーブは皆の心の準備が整ったことを確認し、扉を開けた。

すると扉に向かって風が吸い込まれ、ストレンジャー達は扉の中へ吸い込まれて行った。

ビリーブは一番最後に入り、扉を閉めた。

扉は閉まると、その場から消えてしまった。

## 事態の急変

---

扉の中に吸い込まれたストレンジャー達は、辺りが複雑な、不思議な空間をさ迷っていた。しばらくその空間をさ迷っていると、目の前に島が見えてきた。ストレンジャー達はその島に次々と着地し、辺りを見渡した。

その島は、周りが崖で、中心に社と思われる建物の立っている島だった。

「ここは、」

「僕の生まれ故郷。 セレモニーラインです。」

ビリーブは辺りを見渡しつつそう言った。

「じゃあここが、夢の世界。」

「はい。 ここが、空想と夢の世界。 ファンタスティックドリームワールドです。」

ビリーブは美津華達にそう言った。

「ここは、俺達の住む世界であり、作られた者達全員が住む世界だ。 創造主の空想と夢で作られた世界だ。」

「この世界のどこかに、夏菊がいるのか？」

「そう言うことだな。」

藍樹の問いかけに、ピスフリーは応答した。

ビリーブは立っていた場所から移動し、社に向かった。

社の近くで、ビリーブは方膝をついて座った。

「お母さん、ただいま。 自分の大切な方がこの世界に連れてかれたんです。 その方のいるお城はどちらにありますか？」

ビリーブは社にいる母親に対して、そう言った。

すると、社から光が飛び出し、ある方向を示した。

「この光の先に、マスターがいらっしゃいます。」

ビリーブは立ち上がり、ストレンジャー達に言った。

光は島を突き抜けて海を示していた。

「海を渡らないと駄目みたいだな。」

コレージは陸地で行ける場所まで光を辿り、崖際まで行った。

「よし、じゃあアイツに頼むとするかな。 アルドール、ピスフリー、ジョイ。」

ストレンジャーはそう言うと、アルドール達を集合させた。

「何をするの？ スtrenジャー。」

「俺達の力を合わせて、四神のもう一人の存在を呼ぶんだ。 最後の力、地の力を統べる存在をな。」

「わかったわ。」

そう言うと、ストレンジャー達はそれぞれ目を瞑り、手を胸の前に構えた。

『四神が集まりし最後の力よ。』

『私達の元へ現れ。』

『道しるべとなり力を授けよ。』

『来てくれ。 黄龍の存在、グロウ！！』

四神であるストレンジャー達は集まってもう一人の存在の心に呼びかけた。

するとストレンジャー達の足元から光が出てきた。

それと同時に地面が揺れだした。

「これって、ホタル？」

「うわっ！ ゆ、揺れてる！」

「何が起こってるの？」

美津華達は動揺しつつ状況を見守った。

ストレンジャー達の足元から出続けるホタルは、ストレンジャー達の頭上に集まり、強烈な光を放った。

そして、光の中から一匹の龍が出てきた。

「貴方方の呼びかけに答え現れました。 青龍、朱雀、白虎、玄武様方。」

龍は翼を羽ばたかせながら、ストレンジャー達の元へ降り立った。

「久しぶりだな。 グロウ。」

ストレンジャーは出てきた龍に対してそう言った。

出て来た龍は普通の龍ではなく、黄龍だった。

その黄龍の名前はグロウ。 その名前はストレンジャーが名付けたものだ。

「元気そうで良かったよ。 スtrenジャー」

グロウと呼ばれた龍はストレンジャーに言った。

「お前・・・！ グロウなのか？」

目の前に召還された黄龍に対して、ピスフリーは驚きつつ言った。

「久しぶり、アルドール、ピスフリー、ジョイ。」

「まさかグロウが黄龍だったなんてね。」

「ストレンジャーは知ってたのね？」

ジョイはふとそう思い、ストレンジャーに言った。

「まあな、こういう時が来るまで黙ってたんだ。 すまない。」

「ストレンジャーを苛めないで、ジョイ。」

グロウはそんな2人のやり取りを聞き、ジョイに顔を近づけつつ言った。

少々怒っているらしく、言動もそんな感じに言っていた。

「わ、わかったわよ。 顔近いって・・・」

ジョイは自分の前に来た龍の顔に動揺しつつ言った。

「グロウ。俺達をこの光の指す場所まで運んで行って欲しいんだ。飛ぶ手段が無い奴だけでいいから。」

ストレンジャーは社から飛び出す光を指差しつつ、グロウに言った。

「了解だよストレンジャー　じゃあ皆さん、乗ってください。」

グロウは背中を向け、飛べないピスフリー、ジョイ、美津華、藍樹、恵を背中に乗せた。

「うわああ、龍の背中に乗れるなんて感激！」

恵はグロウの背中にくっ付きつつそう言った。

「お前も夏菊に作られた存在なのか？」

藍樹はふと思い、グロウにたずねた。

「ストレンジャー達がその人に作られたなら、僕もそうだよ。ストレンジャーよりも、もっと本物の龍に近づけた存在みたいだね。」

「じゃあ皆！　マスターの元へ急ごうぜ！」

「OK！！」

ストレンジャーの号令を合図に、ストレンジャー達は夏菊のいるとされる城に向かって飛んで行った。

「ラプソディ。　おかわりいる？」

「うん。 ありがとうホネスティ。」

一方こちらは囚われの身、だと思えるラブソディー行。  
だが今は、ホネスティと共にティータイムを取っていた。  
お茶の葉は、花畑で摘んだカモミール。

「ただいま。 ラブソディ、ホネスティ。」

2人がティータイムを取っていると、ホープが帰ってきた。

「お帰りなさい、ホープさん。」

「首尾はどうだった？」

ホネスティはティーポットに入っているハーブティを別のカップに注ぎ、ホープに手渡しつつ言った。

「ああ、あいつらはもうこの世界に来てるぜ。 そしてこっちに向かっていることもな。」

ホープは今までの進行状況を、2人に報告し、一服した。

「あとは、貴方様から皆さんに報告して、行動してもらえればいいのです。」

「わかりました。 ホープさん。 ホネスティさん。」

「そうはさせませんよ。」

3人が会話をしていると、不意に部屋の扉が開き、チェリーが護衛と共に入ってきた。

「まさか身近にいる人が裏切るとは思いませんでしたね。 いい度胸ね。」

ホープとホネスティはラブソディとチェリーの間に入り、操られているチェリーを見た。

「偽者・・・！ アリス様から離れろ！！」

「それも知られてしまったか。 では、仕方ないな！！」



チェリーはそう言うと、ホープとホネスティを見た。

「キャア！」

「クッ！」

ホープとホネスティはチェリーの眼光を食らい、その場に倒れてしまった。

「ホープさん！ ホネスティさん！」

ラプソディは2人の元へ駆け寄った。

2人は意識は無いものの、息はしていたため、生きていることは確認できた。

「貴方もだ！」

「！！」

ラプソディも同様にチェリーからの眼光を食らい、気絶してしまった。

「さあ、その者達を中庭へ連れて行きなさい。」

「かしこまりました・・・」

チェリーがそう言うと、部屋に大量のリザードマンナイト達が入って、3人を捕まえ、中庭に連れて行った。

「さあ、ショータイムの始まりだ！！」

チェリーはそう言うと、中庭に向かって行った。

## 苦しみの最中の攻防戦

---

一方、ラブソディのいる城ではそんな事が起きているとも知らずに、ストレンジャー達は城を目指して飛んでいた。

翼のあるストレンジャー、アルドール、ブラベリーは自力で飛び、ビリーブは破魔矢に跨り、コレージはマントを翼に変えて飛んでいた。

羽の無いピスフリー達は、ストレンジャー達の呼びかけにおおじて召還された、グロウの背中に乗って城を目指していた。

「あ！ 城が見えてきたわ！」

恵は視線の先に城が見え、指差しながら言った。

「あの城に、夏菊が。」

「光の指している方向も間違い無い。 あの城にいるな。」

「急ぎましょう！」

ストレンジャー達は少し飛ぶスピードを速め、城を目指して行った。

「放て！！」

ストレンジャー達が城周辺の海上に行くと、城にいたりザードマン達がストレンジャー達目掛けて攻撃を開始した。

「キャア！！ 危ない！！」

「チッ！ 好き勝手やりやがって！！」

ストレンジャー達は地上からの攻撃を避けつつ、城へと急いだ。

城の上空へ到着すると、四方八方から攻撃が来た。

「中庭に下りるぜ！！」

ストレンジャーがそう言うと、全員が高度を下げ、中庭に向かって行った。

「危ない真似をしてくれるぜ、敵は。」

ピスフリーはグロウの背中から降り、不満を言いつつ辺りを見渡した。

中庭には特に人影は見当たらず、危ないくらい静かだった。

「マスターは何処に？」

「いらっしゃい。 夏菊に創られた存在達とそのご友人方。」

ビリーブは夏菊の姿を探していると、ふと何処からか声がした。

「だけど貴方方には用は無いの。 消えていただけるかしら？」

「何処だ！！ 姿を現せ！！」

コレージは辺りを見渡し、敵に向かって言った。

するとストレンジャー達の右前方から一人の人影がこちらに向かってくるのが見えた。

その姿は、紫色のワンピースに、金色の髪をした少女、チェリーだった。

「お前、マスターを何処へやった！！」

「貴方方のマスターなら、そこにいるわ。」

チェリーが指差した方向を、ストレンジャー達は見た。

そこは中庭の中心で、そこから大きな茨が生えており、空へ向かって伸びていた。

その茨の先には、気を失っているラプソディが、薔薇と茨に縛られ、磔にされていた。

茨の生えている地上付近には、動揺に気を失っているホープとホネスティが縛られていた。

「マスター！ ホープ！ ホネスティ！！」

「お前！ 味方までなんて事を！！」

藍樹はチェリーに向かって言い放った。

「そんな裏切り者は味方でも何でも無い！！ さあ皆、この者達を始末なさい！！」

「ハッ！ チェリー様！！」

チェリーの声を聞き、城の至る所からリザードマン達が現れ、ストレンジャー達に襲い掛かった。

「チッ！ 厄介な奴らだな。」

ストレンジャーはやってくる敵に対して言いつつ、剣を構えた。

「敵が多すぎるわ！」

「だけど、早くマスターを助けないと！」

ジョイとアルドールは前方の敵からの攻撃を防ぎつつ言った。

すると、上空から隕石が降って、アルドール達の前方にいた敵を倒した。

「お前らは邪魔な奴らだけ払って、マスターの元へ！ ご友人達は、自分達が守る！」

ブラベリーはアルドール達の前の敵を鎖でなぎ払い、そう言った。

「マスターを頼みます！」

「恩にきるぜ！ 皆！！」

「行くぜ！」

ストレンジャー達はブラベリーが開いた道を進み、ラブソディの元へ向かっていった。

「さて！ 楽しませてくれよな！！」

コレージは両手に刀を召還し、敵に向かって言い放ち、突撃して行った。

「皆さんを傷つけさせません！！」

ビリーブは右手に破魔矢を持ち、相手に切りかかった。

「大切、家族・・・手出し、させない！！」

ブラベリーは手に鎖を召還し、相手に攻撃して行った。

「大地の力よ！ 皆さんを守って！！」

グロウは背中に美津華達を乗せ、自分と美津華達を大地の力で守った。

リザードマン達はただ、相手に向かって突撃し殲滅のための行動を行った。

ストレンジャー達は邪魔な相手を蹴散らし、ラプソディの囚われている茨の元へ向かって行た。

だが前方から新たな敵が舞い降り、ストレンジャー達に攻撃した。

ストレンジャー達は攻撃を受け止め、相手に反撃した。

「マスター！！」

ストレンジャーは気を失っているラプソディに対して叫んだ。

だがその声は耳に届いていないようだった。

「さあ！ どんどん蹴散らすのよ！！」

チェリーがそう言うと、さらに敵が増え、ストレンジャー達に攻撃をさせた。

リザードマン達は戦う兵器の用に、ただ倒すために戦っているようだった。

「くそっ！ こいつらは兵器か！！」

「これじゃあきりが無いわ！！」

ストレンジャー達は倒しても倒しても減らない敵に対して言った。

「チッ！ ファイヤーブレス！！」

ストレンジャーは相手を攻撃しつつ、隙を突いて茨に炎玉を放った。

バチバチバチッ！！

「なにっ！！」

だが炎は茨に到達する前に、紫色のバリアーに阻まれてしまった。

「クソッ！ これじゃああの時と一緒にじゃねえか！」

ピスフリーは攻撃を阻んだバリアーを見つつ言った。

茨にはバリアーが張られており、遠距離攻撃が通用しなかった。

「だったら、あの時の攻撃をするまでよ！」

アルドールはそう言うと、近くの敵を杖でなぎ払い、扇を両手に召還しその場で回り始めた。

「そう言うことだな！！」

ピスフリーは同様に敵をなぎ払い、アルドールの近くへ移動し、ハンマーを振り回した。

「セイント……！ ロンド！！」

アルドールは竜巻を作り、茨に向かって放った。

ピスフリーはその竜巻の回転数をさらに増やして放った。

その竜巻にジョイは乗り込み、自ら回転して茨を囲むバリアーに向かって攻撃した。

「くらいなさい！！」

バチバチバチッ！！！！

ジョイが乗り込んだ竜巻はバリアーに当たると、激しい紫色の閃光を散らし、攻撃を防いだ。

「ホーリングアロー！！」

すると、後方で戦っていたビリーブは辺りに散る紫色の閃光を目にし、破魔矢を入り放った。矢は白い粒子を纏い、竜巻と一緒に攻撃をした。

すると

パァアアンッ！！！！

バリアーは、竜巻の強烈な風圧と物理攻撃、破魔矢の強力な霊力に耐え切れず、破壊された。

「やった！！ 割れたわ！」

「貴様ら！！ 容赦しないぞ！！」

バリアーが破かれ、チェリーは体から黒い波動を出し、城にいるすべての存在に攻撃した。

「キャアアア！！」

「ウワアッ！！」

ストレンジャー達は波動に吹き飛ばされ、四方八方へ飛ばされ、壁に激突した。敵味方関係無く、放たれた波動はすべてを飲み込み、壁へぶつかった。

「いたたた・・・」

ストレンジャー達は痛む背中を抑えつつ、ゆっくり立ち上がった。

吹き飛ばされたりザードマン達は、そのまま倒れていた。

だがその表情は、襲い掛かってきた時と同じで、苦痛の顔ではなかった。

『操られていたのか・・・』

「小癪な存在どもめ！ 私に逆らったことを後悔するがいい！！」

チェリーはそう言うと、再び波動を発射すべく、放つための準備態勢に入った。

『クソッ、どうすれば！！』

「う、ううん。」

一方、バリアーが無くなり、意識が戻ったホープとホネスティ。

目を開けると、自分達の目の前にはいつものチェリーでは無いチェリーが立っていた。

「アリス様！！」

「大変！ 他の方たちもやられているわ！」

ホネスティは辺りを見渡しつつ言った。

辺りには吹き飛ばされ、怪我を負ったりリザードマン達が倒れていた。

他の場所には怪我をしたストレンジャー達がチェリーを見ていた。

「このままじゃ俺達の負けだ。」

「何とかして、アリス様を救わないと。 ラプソディも・・・」

ホープは自分達の上で気を失い囚われているラプソディを見た。

まだ目が覚めていないらしく、腰に付けている布地のみ揺れていた。

「起こすのも先だが、ここから出ないと。」

「任せて！」

ホネスティはそう言うと、手にスティックを召還し、茨を切った。

動揺にホープを縛り付けていた茨も切った。



「よし、俺はアリス様と敵を引離す。 ホネスティはラブソディを目覚めさせろ。」  
「了解よ！」

ホープとホネスティはそれぞれ、行動に移った。

「ラブソディ！ 起きて！！」

ホネスティはラブソディの元へ行き、ラブソディの体を揺すった。  
だが、ラブソディは目を覚まさない。

「もう！ 起きなさいってば！！」

ホネスティはラブソディの顔を叩きながら言った。

「中々手ごわいわね。 どうしよう。」

ホネスティはとりあえずどうにかして起こすために、いろいろと行動した。

「アリス様！ 目を覚まして下さい！！」

ホープはラッパを手に召還し、チェリーに向かってラッパを吹いた。

「何！ お前らいつの間に！ クッ！！」

チェリーはホープの奏でたラッパの音に縛られ、身動きが取れなかった。

「縛られし獣の叫び！ クレッシェンド！」

ホープはラッパを強く吹き、チェリーが逃げないように強く縛り付けた。

「クソッ！ 解けない！！」

チェリーはもがくものの、自分を縛る音から開放されなかった。

ストレンジャー達は、そんなホープ達の行動を遠くから見ていた。

「あいつら、何をしてるんだ？」

ストレンジャーは目の前で繰り広げられている行動がよくわからず、混乱していた。敵の親玉と思われる敵を拘束し、連れ去った自分のマスターを助けているのだから。

「こんなことしてられない！ ビリーブ！！」

ストレンジャーは我に帰り、ビリーブに探し叫んだ。

「ストレンジャーさん！？」

「今がチャンスだ！ アイツに向かって札をぶちまけろ！！」

「は、はい！」

ビリーブは負傷した体を起こし、両手に札を構え、チェリー目掛けて攻撃した。ストレンジャーも動揺に立ち上がり、チェリーの元へ走って行った。

「な、なんだ！！」

チェリーは自分を拘束している音から逃れようとしていると、別の方向から札が大量に飛んできた。

札はチェリーに直撃すると、全身に破魔の力が流れた。

「ク、グハッ！！」

チェリーは全身に走る痛みに、叫んだ。

すると、チェリーの後方に黒い影が出始めた。

「く、くそっ！ 術が破れ始めている！！」

チェリーは自分の体から離れる影を見て、あせった。

「その影が大元か！！」

ストレンジャーは相手の焦り具合と、起こった事態を確認し、影とチェリーの背中目掛けて剣を振り下ろした。

剣はチェリーに入り込んでいた影を切り、影を切り離した。

<グワァアアッ！>

「ウッ……」

元に戻ったチェリーは気を失い、その場に倒れた。

「アリス様！！」

ホープは急いで倒れたチェリーを支えた。

「さあ！ もうこれまでだぜ！！」

ストレンジャーは自分が切断した、影を見つつ言った。

<小癩な……！！ これでも、くらいやがれ！！！！>

影はそう言うと、自分の体から先ほど以上に強力な波動を出し、全員を吹き飛ばした。

「クッ！！」

「ウワッ！！」

「キャア！！」

ストレンジャーは再び技を食らい、吹き飛ばされ壁に激突した。

ホープはチェリーを抱えたまま吹き飛ばされ、同様に壁に激突した。

ホネスティはラプソディを庇い、自分の体で相手の攻撃をすべて受け止め、ラプソディと共に吹き飛ばされてしまった。

アルドール達の場所にも同様に波動が接近し、皆を壁に打ち付けた。

「クソッ、ここ まで か・・・」

ストレンジャーは自分の前方に立つ敵を見つつ、気を失い倒れてしまった。

アルドール達も同様に気を失い、その場に崩れてしまった。

「う、うーん。」

茨から解放され、別の場所に倒れていたラブソディは目を覚まし、ゆっくりと起き上がった。すると、目の前には酷い光景が広がっていた。壁の近くの至る所に、リザードマン達が倒れていた。

同様に、藍樹達、ストレンジャー達も意識を失って倒れていた。中庭には、茨の残骸が転がっていた。自分の体の上には、ボロボロの姿のホネスティが倒れていた。

「なんて、酷い有様に・・・」

ラブソディは起き上がり、ホネスティを壁にもたれさせる感じに寝かせた。中庭の中心を見ると、そこには黒い影が立っていた。

「貴方、なぜこんなに酷い事を。」

ラブソディは影に近づきつつ、言った。影は突っ立ったまま、ラブソディの方へ振り返った。

<簡単さ。俺の事を捨てた奴らへの復讐！そしてそんな奴らに従える認められた存在の消去さ！！>

影は怒りをあらわにしつつ、ラブソディに言い放った。

「なぜそこまでして、貴方はそんな醜い事を。」  
<俺の存在を、見捨て！捨て続けたからさ！！>

影は再びそう言った。

<俺も、認められた存在になりたかった。ただそれだけだったのに！！俺を作り出した創造主は皆！俺を見捨て続けた！俺も作り出された時はどんなに嬉しかったか、その時の喜びは忘れたくなかった。だが俺は作

り出され、存在を見捨てられる、忘れられる酷い仕打ちを受け続けた。 そんな事をするマスターなど生きている資格など無い！！ 平和に過ごしている存在がむかついた！！>  
「貴方はそんな、悲しい感情に支配され、そのような姿になってしまったのですね。」

ラプソディは影を見つつ言った。  
影には足は無く、マントを身に纏っているかの様な姿をしていた。  
体の色はどんな黒よりも暗い色、漆黒のような色をしていた。

<お前らなんか！ 生きている価値など無い！！ 消えてしまえ！！！>

影はそう言うと、ラプソディに向かって襲い掛かってきた。  
ラプソディはその攻撃を避け、手に傘を召還した。

「話し合いでは、もう貴方を止めることは出来そうにありませんね。」

ラプソディは敵を見つつそう言った。  
影は体中から黒いオーラを出し、すべてを拒絶していた。

「では、力づくでも貴方を止めて見せます！」

ラプソディは敵に向かって突撃して行った。

敵は強烈な黒いオーラを身に纏い、ラプソディに襲い掛かってきた。  
ラプソディは攻撃をかわしつつ、近距離からの攻撃、遠距離の魔法攻撃で対抗した。

「wind！！」

ラプソディは強力な風の渦を相手に向けて放った。

<そんなもの！！>

敵はそう言うと、風の渦を手ではじいてしまった。

「！ ならこれならどうです！！ ハッピーストームス！！」

ラプソディは続いて、クローバーを手に召還し、相手に先ほど異常の強烈な風圧で攻撃した。

<くろうか！！>

だが相手は同じように攻撃を防ぎ、ラプソディに攻撃した。

ラプソディは襲い掛かってきた敵の攻撃を、傘で防いだ。

「ッ！！」

<お前の技などくわらない！！ お前は弱い！！>

敵はラプソディに攻撃しつつ、そう言った。

そして、敵はラプソディの傘を払い、回し蹴りをし、ラプソディを突き飛ばした。

「クッ！」

ラプソディはそのまま壁に激突し、背中を押さえた。

「いたたたた・・・」

<弱いな。 お前は。>

敵はそう言いつつ、近くのリザードマンの下へ行き、頭を掴んだ。

リザードマンは気を失っているため、抵抗しなかった。

<お前らなんか！>

「や、止めて！！」

<消えてしまえ！！>

敵はそう言うと、掴んだリザードマンに剣を突き刺した。

刺されたリザードマンは、指された場所から粒子になり、消えてしまった。

「！！」

<アッハッハッハッ！！！！>

相手はそんなラブソディの様子と、リザードマンを消した気分浸かっていた。

ラブソディはそんな相手の行動を目の当たりに、頭を垂れた。

「どうしよう・・・自分が力不足ばかりに、皆さんが・・・」

ラブソディは手を地面に付け、涙を流しつつ言った。

敵はラブソディが意気消沈している時も手を休めず、近くにいるリザードマンを片っ端から頭を掴み、消していく。

「どうすれば・・・」

「マ、マス、ター・・・あきら、めるな・・・」

ラブソディが意思を弱め消沈していると、近くに倒れていたストレンジャーが目を開け、ラブソディを見つつ言った。

ストレンジャーは立ち上がる体力がもう残っていないため、床にうつ伏せの状態でした。

「ストレンジャー君、自分にはどうすることも出来ない。アイツに敵いっこない。」

ラブソディはストレンジャーの意見に対し反論し、首を横に振った。

「マスターが、諦めたら、誰が、アイツの、事を、助けるんだ？」

「！」

ラブソディはストレンジャーの言った事に対し、我に返った。

「俺達も、そうだが、お前の、ことを、連れ去った、ホープや、ホネスティ。そして、あの



少女にアイツも、もうマスターにしか、助けることが、出来ないんだ。」

「皆さんの、助ける・・・」

ラプソディは顔を起こし、辺りを見渡した。

アルドールやピスフリー達は別の場所の壁近くに倒れ、ホープはチェリーを抱えて倒れていた。

ラプソディが目を覚ました所には、ホネスティが壁に寄りかかり、気を失っていた。

そして、ラプソディの近くには、ラプソディが気を失っているときに懸命に戦い、深手を負ったストレンジャーが倒れていた。

「ストレンジャー君。 自分はどうしたら・・・」

「マスターの、好きなように、してくれ。 マスターの行動には、間違いは、無いはずだ。 俺はそう、信じている、から、な。」

ストレンジャーはそう言うと、体力を使い果たし、目を閉じてしまった。

ラプソディはストレンジャーのそばに行き、ストレンジャーの体を起こした。

衣服には切られた箇所が多数あり、体は汚れていた。

ラプソディはストレンジャーを抱え、近くの壁に寄りかかるようにして置いた。

「ストレンジャー君。 ありがとう。」

ラプソディは気を失ったストレンジャーに対してそう言い、その場に立ち上がった。

<ん?>

敵はリザードマンの頭を掴んだまま、視線を感じ、その方向を見た。

その場所には再び立ち上がったラプソディの姿があった。

「その方を、離しなさい。」

<まだやる気か。 今度は起き上がれないほどの傷を負うことを覚悟のうえか?>

「もう、自分は貴方に負けません。 貴方の事を止めて見せます。」

<ほう、やる気か。 いいだろう。>

敵はそう言うと、持っていたリザードマンをラプソディの方へ放り投げた。

ラブソディは飛んできたリザードマンをキャッチし、ストレンジャー同様に壁のそばに横にした。  
息はしているため、まだ死んではいなかった。

<次に消すのはお前だ！！>

敵はそう言うと、手を剣に変え、ラブソディに向かって突撃してきた。

『お願い皆。 自分の事を見守っててください。』

ラブソディは気を失って倒れているストレンジャー達にそう言いかけ、手に傘を召還した。

「あの方を、止めます。」

そして、相手に向かって突撃して行った。

## 狼の制裁

---

2人はそれぞれが持っていた武器で攻撃し、それぞれの攻撃を受け止めた。  
そしてそのまま攻撃を払い、敵に向かって何回も攻撃をした。

<なかなかやるな。 これならどうだ！！>

敵はそう言うと、攻撃を払いその場から下がり、体からオーラを発射した。

「プロテクト！」

ラプソディはそう唱えると、目の前に六角形の壁が出現し、攻撃をすべて防いだ。  
敵はオーラを出し終わると、こちらに向かって来た。

「アニティグラシール！！」

ラプソディは手を相手に向け、強力な氷結弾を敵に向かって連射した。  
相手は攻撃をすべて避け、ラプソディに攻撃した。  
ラプソディは持っていた傘で相手の攻撃を受け止めた。

<そんな技で、俺が倒せると思ってるのか？>

「ええ！ 属性がくらわないのなら、これならどうです！ アニティサーコード！！」

ラプソディは攻撃を受け止めたまま、相手に向かって強力な聖なる力の弾を連射した。  
敵は回避することが出来ず、直にすべて食らった。

<グワアッ！！>

聖なる力は相手を取り囲んでいた黒いオーラをすべて相殺し、相手を普通の状態にした。

「これで対等、貴方は他の技も食らいます！」

<小癪なまねを！！ 波動発射！！>

相手はラプソディの攻撃を払い、オーラで攻撃した。  
だがラプソディはその攻撃を傘を開いて受け止め、無効化した。

<何！ オーラを傘で防いだだと！>

「セントソード！！」

ラプソディはそう言うと、空いている手に剣を召還し敵を攻撃した。

敵はその攻撃を受け止めようとしたが、少し遅かったため、攻撃は体を貫いた。

<グハッ！ ！ 闇の、力が！！>

相手の体に詰まっていた闇の力は、剣からの聖なる力に相殺され、すべて消し飛んだ。

「これでもう、貴方に闇の力は使えません。」

<クッ 闇の力を使えないからと言ってなめんなよ！！>

相手はそう言うと、体から強力な熱を発生し、ラプソディを吹き飛ばした。

ラプソディは上空で体制を建て直し、地面に着地した。

敵はラプソディがいなくなると、体に刺さっていた剣を引き抜き、捨てた。

「今度は炎ですか。 ならば！ ファイル！」

ラプソディは着地した態勢のまま、相手に向かって水を発射し、攻撃した。

だが水は、相手に到達する前に蒸発してしまった。

<そんなもの！ くらうか！！>

相手はそう言うと、ラプソディに向かって火炎球を発射した。

「ブラインド！」

ラプソディは対属性用の壁を召還し、火炎攻撃を防いだ。

「水の力を甘く見ないでください。 アニティアクア！」

ラプソディは敵に対してそう言うと、先ほど以上に強い水力玉を、相手に向かって連射した。

水は手前にいたものから次々と蒸発したが、残った水は敵に到着した。

<クッ、>

「カップウォール！！」

ラプソディはそのまま相手の上空へ移動しつつ、手に杯を召還し、強力な水力で攻撃した。頭上からの水圧は、重力と共に降ってくるため、蒸発することが不可能で、すべての水を、敵は食らった。

<グワアアアアアアッ！！>

敵は水を食らい、水の重力に逆らえず床に打ち付けられた。ラプソディは上空から床へ着地し、相手を見た。

「これで、終わりです。」

<何を・・・！>

「ワンドロンド！」

ラプソディは持っていた杯をバトンに変え、相手に向かって突撃した。敵は座ったままの状態ですらラプソディからの連続攻撃を手で防いだ。

<これくらい！>

「甘いです！」

ラプソディはそう言うと、敵の受身を両手で払い、防御を崩し、渾身の力で相手のボディを殴った。

敵はその攻撃に受身が取れず、そのまま殴られた勢いで壁に激突した。

<グハッ！>

敵はしばらく壁にめり込み、重力によって床に叩きつけられた。

<クッ・・・>

敵はラプソディからの強力な攻撃に、殴られた箇所を押さえていた。

ラプソディはそんな敵の元へ、持っていたバトンと傘を地面に捨て、ゆっくりと近づいた。

<く、来るな！！>

「・・・」

ラプソディは敵の言うことを耳にせず、敵に近づいた。

<！！>

敵は体から熱をラプソディに向けて発射した。

だがラプソディは体に当たる熱風にひるまず、近づくことを止めなかった。

ラプソディは敵の近くへ行くと、ゆっくりとその場に座った。

そして、敵に向かって手を伸ばした。

<ふ、触れるな！！>

敵はそう言うと、左手に短刀を召還し、ラプソディに向かって刺した。

「クッ・・・！」

短刀はラプソディの右胸に突き刺さった。

だがラプソディは動くことを止めず、敵を優しく抱え込んだ。

<や、止めろ！ 離せ！！>

敵はさらに強力な熱風をラプソディに向けて放った。

だがラプソディは零距离からの攻撃にはもう怯まず、抱えたまま相手に言った。

「もう、そんなことをしなくていいんです。 止めましょう。」

<だ、黙れ！！>

相手はラブソディから離れようとしたが、ラブソディは敵を離さなかった。

「貴方はただ、自分の存在を認めて欲しかった。 一人は嫌だった。 マスターに認めてもらえていた存在が憎くて、ただそれだけでこのようなことをしてしまった。」

<う、うるさい！！>

「貴方は、認めてもらえない自分の存在が消えて欲しかった。 だから貴方は闇に飲まれてしまった。」

ラブソディは暴れる敵を抱えたまま、言い続けた。

「もう、貴方を一人にはしません。 存在を否定、しません。 だから、もうこんなことは止めましょう。」

<・・・そんな事、他のマスター達と同じだ。>

敵は暴れるのを止め、ラブソディに向かって言った。

<皆そうだった。 俺の存在が出来た時、どんなに嬉しかったか。 どんなにマスターに尽くそうとしたか。 だがマスターに捨てられた。 だが新しいマスターがまた出来た。 だが、また捨てられた。 次々と同じ連鎖が続いた。 もうそんなのは嫌なんだ。>

敵は涙を流しつつそう言った。

ラブソディはそんな敵を見つつ話を聞いた。

<皆、自分さえいられれば他者のことなんて気にしない。 周りの事なんか気にしない。 だから俺も皆を消そうとした。 記憶を失くさせようとした。>

「それが、貴方にしたマスターの仕打ちの見返りだったんですね。」

ラブソディは話を聞き、敵がどうしてこんなことをしたのかを知った。

<もう、俺は一人ぼっちになるのは嫌なんだ。 認めて貰える存在になりたかった。 ただそれだけだったのに・・・>

敵は涙を流しつつそう呟いた。

ラプソディは涙を流す敵を見て、頭を撫でた。

「そんな貴方にこんな提案をする事はどうかとは思いますが、聞いていただけますか？」

<・・・>

敵はラプソディの言った事に何も言わず、話を聞いていた。

ラプソディはそのまま話を続けた。

「自分に、最初で最後のチャンスを下さい。 貴方が自分にそのチャンスを下されば、貴方の存在を、本当に認めてもらえる存在に私はします。 もう貴方を一人ぼっちにさせないと、約束します。」

ラプソディはそう言うと、その場に立ち上がり、相手に背中を向けた。

<そんな事・・・>

「貴方が選んでいいんです。 自分の左胸に剣を突き刺し、心臓の鼓動を止めて殺しても構わない。 チャンスを受け入れても構わない。 それは貴方が選んでください。 自分はもう、貴方に抵抗はしません。」

ラプソディはそう言い放ち、そのまま敵の前に背中を向けたまま立っていた。

<どうして、そんなに俺の事に気を使うんだ・・・ 俺が剣を召還して、お前の命を奪うかもしれないのに。>

敵は自分に背中を向けるラプソディに対して、そう問いかけた。

「貴方のことを信用しているからです。 貴方は自分の事を殺さない。 そう信じているから、このような提案を出すんですよ。 貴方の存在を認めるのに、貴方の事を信じないはずが無い



でしょ？」

ラブソディは敵からの質問に、そう答えた。

< . . . . . >

敵はラブソディにそう言われ、黙った。

< . . . ラブソディ。俺はお前のことを信用する。俺はお前にチャンスをやるぜ。 >  
「よろしいですか？」

ラブソディは敵がそう言うと、振り返ってそう言った。

< もう貴方のような存在に出会えないかもしれない。これがラストチャンスだ。それを、貴方に託します。 >  
「ありがとう。」

ラブソディはそう言うと、敵を優しく抱いた。

敵はそんなラブソディを見つつ、ラブソディの右胸に突き刺した短刀を抜き、傷口を熱で塞いだ。  
。

< 俺のことを . . . 認めてくれる存在にしてくれ。 >  
「わかりました。」

敵がそう言うと、ラブソディは手に新たなクローバーを召還した。

「準備はいいですか？」

< はい。 >

敵はそう言うと、ラブソディの持っているクローバーに手を置き目を瞑った。

『迷いし1つの大きな存在よ。 貴方の心の傷を癒し、貴方に安らかな希望と人生を送るために、姿を変えよ！』

ラブソディは胸の中でそう唱えると、敵の足元から風が吹き出し、敵を包み込んだ。

<優しい、気持ちだ・・・>

敵はその風の中に包み込まれ、暖かな気持ちになった。

そして敵は風の中で、体の形が変化し、段々と形になっていった。

体に色が付き始め、顔や体が見てわかる状態になり、手袋と靴が装着された。

そして体の変化が終了すると、敵を包んでいた風は強力な光と共に散って行った。

「もういいですよ。」

ラブソディはそう言うと、敵だった存在は目を開けた。

ラブソディの手に乗せていた自分の手は、黒から白い手袋を身に付けた手に変わっていた。

「こ、これは・・・」

「貴方は新しい存在として生まれ変わりました。 これで、貴方は自分から忘れられない、存在へと姿を変えました。」

ラブソディの前にいる存在は、ゆっくりとその場に立ち上がった。

全身は赤と白のボディ、手には青と白の模様が入った手袋。

髪は鋭い紫のトゲ、体の中には熱い血が流れていた。

「自分にチャンスくれた結果、貴方はこのような姿として生まれ変わりました。 貴方は今日から、プロミス・ザ・ヒートとして生まれ変わちなさい。」

「自分は、プロミス・ザ・ヒート。」

プロミスと呼ばれた存在は、自分の体や新しいマスターとなったラブソディを見つつ言った。

「貴方のその名前は、『人々に、大切な炎を提供する、約束された存在』の意味が込められています。自分が作り出した存在には皆、このようなちゃんとした意味が込められています。」  
「ありがとう、新たなマスター。 四神夏菊。」

プロミスはそう言うと、姿を元に戻した夏菊に言った。  
2人がそのようなことをしていると、城が揺れ始めた。

「な、何？」  
「俺の邪悪な心が無くなって、形を失っているんだ。 元々はこのような形の城ではなかったから。」

プロミスは今現在起こっている状況を把握し、夏菊に言った。

「早く、皆さんを安全な所へ避難させないと！」  
「だが、こんな多人数を一気に運ぶことなんて不可能だ。」

プロミスは夏菊にそう言った。  
無理難題が夏菊に振り掛けられ、夏菊は混乱していた頭を正常にしつつ考えた。

「そうだ、この世界は自分が作り出したもの。 なら何でも出来るはず！！」

夏菊はふとそう思い、手にクローバーを握り、天に掲げた。  
クローバーを握っていない手は、プロミスを抱きしめた。

「お願いだクローバー！ 自分達を安全な場所！ テトラクリスタルアイランドへ導いてくれ！！！」

夏菊はプロミスを抱えつつ、クローバーに声を出して祈った。  
するとクローバーは今までに無い強烈な光を出し、城全体を包み込んだ。  
夏菊達は光に包み込まれ、フワフワとした感覚に襲われ、空へと浮かび上がった。  
夏菊とプロミスは段々と意識が薄れ、目を瞑ってしまった。

## 夢と幻の終わり

---

夏菊達が意識を失い、しばらくして。

「う、ううん。」

夏菊は何処か別の場所の地面の上に寝ており、目を覚ました。

自分が寝ている地面は、何処かの草原の上のようだった。

夏菊は体を起こし、辺りを見渡した。

そこは、辺り一面の草原が、崖まで広がっており、崖の先には海が広がっていた。

海とは逆の方向には、森と山があった。

そう、そこは夏菊がストレンジャー達が生活するために作り出した島、『テトラクリスタルアイランド』だった。

夏菊達はいつの間にか、城からこの島に移動していたのだ。

夏菊が手を見ると、そこにはバラバラになったクローバーが握られていた。

強力な願いだったためか、壊れてしまったらしい。

クローバーは粉々になっていたが、何処かの場所を移していた。

それは、藍樹、美津華、恵の部屋だった。

いつの間にか藍樹達は現実世界に戻り、部屋で寝ていることになっているらしい。

クローバーは夏菊に藍樹達の居所を映し終えると、粉々になり風に吹かれて消えてしまった。

夏菊はクローバーからの最後の映像を受け取り、辺りを見渡した。

辺りを見渡すと、気を失って倒れているストレンジャー達が倒れていた。

「ストレンジャー君。起きて。」

夏菊は近くに倒れていたストレンジャーの元へ行き、ストレンジャーを起こした。

体には先ほどまでの外傷は無く、服も元通りになっていた。

「う、うーん。」

ストレンジャーは夏菊の呼びかけに応じ、ゆっくりと起き上がった。

「マスター、ここは・・・」

ストレンジャーは辺りを見渡しつつ、夏菊に問いかけた。

「テトラクリスタルアイランドですよ。 自分達、戻ってこれたんです。 藍樹達も無事です。」

「良かった。」

ストレンジャーはそう言うと、ゆっくりとその場に立ち上がった。  
体はもう大丈夫らしく、元気な姿になっていた。

「マスター、アイツは。」

「ストレンジャー君の言ったとおり、自分の好きにさせていただきました。」

「う、ううん。」

夏菊とストレンジャーが話をしていると、アルドール達が次々と起き始めた。

「マスター 僕達は。」

「大丈夫です。 自分がすべてを終わらせました。」

ビリーブからの質問に、夏菊は正確に答えを述べた。

すると、島には暖かい風が吹いて来て、島が皆の帰りを祝っているようだった。

「皆さん、無事でよかったです。」

「マスターこそ、無事でよかったです。」

コレージは夏菊からの応答に答えた。

「ところで、お前は・・・」

ピスフリーはふと、夏菊のそばにいたプロミスを見つつ言った。

「ああ、彼は。」

「プロミス・ザ・ヒートと言います。皆さんの存在を消そうとしていた、あの影の生まれ変わりです。」

プロミスは自ら自己紹介し、皆の見覚えのある姿の時に言った。

「じゃあ、お前は俺達を殺そうとしていた、アイツの生まれ変わりか。」

「すまなかった。皆。」

プロミスは今までの事を、ストレンジャー達に詫びた。

「マスターが、受け入れられたんですね。プロミスさん。よろしくね。」

アルドールはプロミスの過去の事は気にせず、受け入れた。

「マスターの受け入れた人だからな。俺達は構わないぜ。」

「よろしくな、プロミス。」

「よろしくお願いします。」

ピスフリー達も次々とプロミスの事を受け入れ、挨拶をした。

「皆、自分の事を受け入れてくれるんですか？」

プロミスは少々涙目で、ストレンジャー達に言った。

「もちろんだぜ。マスターが受け入れた、そんなことはどうでもいいんだ。」

「これからよろしくな。プロミス。」

ストレンジャー達は笑顔で、プロミスを受け入れた。

「あ、ありがとう、皆。」

プロミスは涙を流しつつ、ストレンジャー達にお礼を言った。

「良かったですね。 プロミスさん。」

「はい、これも、新たなるマスターのおかげです。 ありがとう。」

プロミスは涙を拭い、夏菊に改めてお礼を言った。

「あ、あの、貴方方は。」

プロミスと夏菊はやり取りをしていると、目が覚めたチェリーを抱えた、ホープとホネスティがやってきた。

「俺達は、とあるマスターに作られた存在さ。」

「お怪我はございませんか？」

ジョイはチェリーを見つつ、問いかけた。

「はい、私は大丈夫です。 ホープさんやホネスティさんが、守ってくださったのおかげです。」

チェリーはホープとホネスティを見つつ言った。

「いや、俺達は何もして無いさ。」

「そうよ。 だから何も言わないで。」

「ありがとう、2人とも。」

チェリーは自分の事を守ってくれた2人に、お礼を言った。

「チェリーさん。 貴方に謝らなければならない事があります。」

ふと、プロミスは前に出て、チェリーに言った。

「貴方のそばに仕えていたリザードマン達、俺はその方々を消してしまった。 そして、貴方の体を使って罪のある行為を行ってしまった。 すまなかった。」

プロミスはチェリーに謝った。

「いいですよ。確かに存在を消してしまったことは罪ですが、貴方はわけがあってそのような事をしたのでしょうか？ 私は、あなたの事をとがめませんわ。」

「そうだ、いろいろあったが、お前は俺達の事を助けた。それだけでも十分さ。」

「それに、全員がいなくなってしまったわけでは無いわ。」

ホープとホネスティはそう言うと、チェリーの後ろから残っていた1人のリザードマンナイトと1人のリザードマンメイドが出てきた。

「俺達の仲間は、確かに全員なくなってしまった。」

「でも、私達も貴方の事は何も言いません。それは前の貴方が行った罪なのですから。今の貴方には何も言うことはありませんわ。」

生き残ったナイトとメイドは、口々にそういい、プロミスを咎めなかった。

「済まない事をした。過去の俺がした事は、今の俺が償います。」

プロミスはチェリーの元へ行き、方膝を付いて言った。

「わかりましたわ。プロミスさん。」

「これからもよろしくな。プロミス。」

「はい。」

プロミスは全員から自分の存在を受け入れてもらえ、改めて夏菊に感謝をした。

「ストレンジャー、アルドール、ピスフリー、ジョイ、ビリーブ、コレージ、ホープ、ホネスティ、プレスル、ティザー、チェリー、グロウ、ブラベリー、プロミス。そして」

夏菊は両手を胸の前で組み、残りの存在を召還した。

それは、今まで自分の事を守り続け、力を貸してくれた存在、ラブソディだった。

「ラブソディ。皆、自分に力を貸し、手伝ってくれてありがとう。」

「もう大丈夫なのですか？ マスター。」



ラプソディは夏菊に問いかけた。

「はい。今となっては、自分はする事はもう何も残っていません。見捨てられていた存在は救われました。もうこれ以上、迷人を作らないためにも、自分は自分達の世界で活動します。」

夏菊は新たな目標が出来、自分の作り出した存在達に言った。

「マスター。俺達は。」

「もう、皆さんに迷惑をかける理由は無くなりました。これからは皆さんに、また平和に暮らしていただきます。」

「それでいいのか、マスター。」

ストレンジャーは一步前へ出て、夏菊に問いかけた。

「皆さんは優しいですね。でもその優しさにすがってばかりでは、自分は将来駄目になって、このような過ちを再び犯してしまうかもしれません。ですから、今までどおりの生活がいいのです。皆さんの下には、自分の偽りの姿、ラプソディがいます。寂しくなんかありませんよ。」

「ですが、マスターは俺達と合えない。」

「いいえ、たとえ皆さんと会えなくても、存在1人1人が繋がっている事は承知のうえです。皆さんがこちらで、自分の事を見守ってくださっている。それだけで大丈夫ですよ。心配しないで。」

夏菊はストレンジャー達が心配しないように、そう言った。

「皆さんは自分が作り出した存在。自分が忘れさえしなければ、自分は皆さんと繋がっています。クローバーは、その証でもあるんですよ。」

夏菊はそう言い、新たに新しいクローバーを手の平に出した。

ストレンジャー達も同様に、先ほど新しく夏菊から貰った、クローバーを出した。

「わかりました。マスター。」

ストレンジャーは夏菊の意見に対して同意し、もうそれ以上は何も言わなかった。

「ストレンジャー君。 お元気で。」

「マスターも元気でな。」

夏菊はストレンジャーを抱き、そう言った。

ストレンジャーも同様に抱き返し、そう言った。

「マスター 俺はもう1つ、言っておくことがあるんだ。」

そんな2人の様子を見つつ、プロミスが前に出て言った。

「何ですか？ プロミスさん。」

「マスターの記憶を失わせて、殺そうとしたのは俺だ。 マスターが今まで歩んできた事は、マスターが作り出した物語だ。 だから、マスターの記憶を、お返しします。」

プロミスはそういい、夏菊のおでこに手を当てた。

すると、夏菊の頭の中に、今までの記憶が流れ込んできた。

「プロミスさん。 ありがとう。」

「マスターがこの世界を後にして、目が覚めたとき、それはすべて夢だったことになっている。 事件は起きてはいなかった。 美津華達とのやり取りは、夢だったんだ。」

「じゃあ、自分はこの夢を見る前に戻るんだね。」

「そう言うことです。 もう1回、夏休みの前の学校生活を思い出したいと思います。」

プロミスは深々と夏菊に報告した。

「ありがとう、プロミスさん。」

夏菊は素直に奉公してくれた、プロミスの頭を撫でつつそう言った。

「それでは、皆さん。 お元気で！！」

夏菊はそう言うと、島に風が吹き、夏菊は宙に浮き上がった。

「マスターも元気でな！！」

「また会いましょう！！」

ストレンジャー達は手を振り、夏菊を見送った。

夏菊は見送りに感謝しつつ、空へと飛んで行った。

そして、空に浮かぶ太陽の元へ向かって飛び、視界が光に包まれた。

## 夏休み前をもう一度

---

リリリリリリリリリリ・・・！！

「う、うーん。」

夏菊がふと目を覚ますと、自分はベットの中におり、近くで目覚ましの音が鳴っていた。夏菊は手を伸ばして目覚ましを止めた。

『夢、だったんだ・・・』

夏菊は体を起こし、目覚ましを見た。目覚ましには日付も付いており、今日の日時を確認できた。

「えっと、7月15日。 夏休み前の平日か・・・」

夏菊は今の時間帯を確認し終え、服を着替え始めた。

『ん？』

ふと、夏菊が手に何かを握っている事に気が付いた。手には、白い水晶で出来た、小さなクローバーが握られていた。

『ストレンジャー君。』

夏菊はふと、ストレンジャーの事を思い出し、制服に着替えた。

そして、今までどおりの一日がやってきて、夏菊は少々忙しそうに身支度を済ませ、学校へ向かって行った。

「夏菊ー おはよう！」

「おはようー！」

夏菊が学校へ行くと、クラスメート達が挨拶をしてきて、夏菊は同様に挨拶を返した。  
学校指定の自転車置き場へ行くと、藍樹が立っていた。

「よう夏菊。 おはよう。」

「おはよう藍樹。」

夏菊は藍樹へ挨拶をし、自転車を藍樹が乗ってきた自転車の隣に止めた。

「なあ夏菊。 今日、変な夢を見たんだ。」

「ん？ どんなの？」

「なんか、夏菊が連れ去られる夢を見たんだ。 で、お前の描いた、ストレンジャー達と行動してたんだ。」

藍樹は今日見た夢を思い出しつつ、そう言った。

夏菊は藍樹の言うことに少々苦笑していた。

「なんだ？ どうした？」

「ううん。 なんでもないよ。 早く行こう。」

「？ おかしな夏菊だな。」

藍樹の言った事に対して、夏菊は苦笑したまま下駄箱へ向かって行った。

そんな少々おかしな夏菊を見つつ、藍樹は夏菊の後を追いかけて下駄箱へ向かって行った。

夏菊と藍樹が学校へ行くと、同様に美津華と恵も夢の話をしてきた。

ストレンジャー達と楽しくビーチバレーをした夢。

トランプゲームでジョイが負け、励ましていた夢など。

藍樹達は、夏菊が今まで密かに書いていた小説と、同じ夢を見ていたのであった。

それと同様に、夏菊自身も。

しばらくして、昼休み。

夏菊は1人、学校の屋上にいた。

屋上の柵に持たれ、空を眺めていた。

屋上には気持ちの良い風が吹いており、初夏の陽気には持って来いの風だった。

『今までの全部、自分が書いた小説を元にして作られた夢だったのか・・・』

夏菊はぼんやりと空を眺めつつ、ついさっきまで自分の身に起こっていた出来事を振り返っていた。

だが、夢では無いことを知らせているのか、夏菊の手には、あの時のクローバーが握られていた。

『また、会えるよね。 ストレンジャー君。』

夏菊は持っていたクローバーにそう言い、クローバーをズボンのポケットの中へ閉まった。

「あ！ こんな所にいたー」

夏菊がクローバーを閉まったのと同時に、恵が屋上と校内を仕切る扉を開け、夏菊を見つづかった。

「夏菊ー ランチ食べようぜー」

「いつもの場所で食べましょう！」

「うん！」

夏菊は藍樹達の呼びかけに素直に応答し、校内へ戻って行った。

そんな様子を、もう誰にも見えない姿となったストレンジャーは、柵の上に立ち、見ていた。

(俺は、マスターの事を忘れない。たとえ見えなくっても、俺はマスターのそばにいるぜ。)

ストレンジャーは、もう夏菊の耳には届かない言葉を言いつつ、夏菊達を見ていた。  
そして、ストレンジャーは翼を広げ、夏菊の後を追いかけて飛んで行ったのであった。

—E P I S O D E   E N D—